

日時： 2021年12月7日（火） 18:30~20:00

講師： 上野千鶴子氏（東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長）

会場： ZOOM ウェビナー

今年度の公開講演会では、女性学・フェミニズムの第一人者である上野千鶴子氏をお招きし、近著『女の子はどう生きるか』に関連したご講演と、同書を読んだ本学の学生との対話を実施しました。

直近の衆院選では政府の掲げる目標値 35%に対し、全候補者に占める女性比率は 17.7%でした。こうした政治や経済の様々な局面における男女格差は、女性の能力や資質に起因するのではなく、教育過程における女性への「無意識のバイアス」や「達成欲求の冷却化」の影響が大きいと上野氏は指摘します。まさにこの点を扱ったのが近著『女の子はどう生きるか』です。同書は、吉村源三郎によるベストセラーの児童書『君たちはどう生きるか』や教育論の名著とされるルソーの『エミール』などが男性のみを対象とし、女性を例外的に扱ってきたことへの応答として、女性の生き方・育て方を説いたものです。上野氏は、統計データを参照して教育や社会の現場でジェンダーバイアスが「常識」として再生産されていることを示しつつ、当たり前を疑わない環境からはノイズが生まれないと述べます。コロナ禍のような予測不能な世界に立ち向かうには「知識を生む知識」が必要ですが、このメタ知識や情報は現状に対するノイズから発生します。上野氏は、少数者の意見は既存のシステムを疑問視するノイズとして機能するがゆえに、女性のみならず多様な声上がることは社会全体を風通し良くすることができるかと提言します。本講演の冒頭で上野氏は、講演タイトルの「ついでに」という語に学生から批判があったことに触れ、不快なことをやり返してよいわけではないけれど、男性たちにも「ざらっと」した気分を感じて女性の置かれた状況を想像してもらおうべくこの語を用いたと説明されました。ご講演を踏まえると、こうした語もまたノイズを生じさせる効果を持つものであるように思われました。

後半では、年齢も専攻も多様な5名の学生が質問者として登壇しました。その1人の質問は、弱者が弱者のまま尊重されることを求めるフェミニズムの思想は、女性を弱者化する社会構造を不問にしてしまうのではないかというものでした。これに上野氏は、障害の議論における合理的配慮を参照しつつ、乳児期や老年期も含めればあらゆる人が潜在的な弱者であり、誰かのケアに支えられていると指摘します。そして妊娠やケアを通じて弱者を抱え込む経験から、女性たちによるフェミニズムは、弱者を切り捨て強者になるのではなく、弱者であっても差別されない社会を求めるものだと回答されました。また今日、男性たちが女性よりも生きづらいと感じている

という調査結果に関する質問には、現行の社会で富や権力の利益配分が元々少ない女性たちの不満に比べ、既得権益や社会における優位性が崩れてきている男性たちの不安の方が強く感じられている可能性を示唆します。その上で手放さなければならぬものが多い男性たちにも、男らしさから解放され、性差別に対する加害者にも被害者にも傍観者にもなって欲しくないと述べられました。

以上のように、一つ一つの質問に真摯にお答えいただく上野氏の姿には、次世代へとフェミニズムのバトンを引き継ぐ実践を目の当たりにしたように感じました。登壇者のみならず視聴者の学生にとっても学びの多いイベントになったことと思われまます。触発するような対話を提供して下さった上野氏と登壇者の学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。

